英文婆廼山口

中村俊定文庫
文庫 18
13

景樹文庫

中村俊定文庫

てひさうつくしきのこころ詠りのこの部にして
あそぶこころにもやふやまとことばの美なること
うるはしておやや者のすりうたるようこつはし
いのあそぶ歌うしあかやまくらの左大将藤
代くに宣の将軍平氏ゆりも二位殿尼
大政入道小松内大臣のつまくらもさひ
をのこされしこしふ勅撰集そのほかの此文
とまに一番まこの番まくもかしこき
こころふやはこ皇ふうのひとるたおせ
うくこれまもこころをゆこまさやふひ
て百額卒貫の法さくやうくやい連
ることくはこまこまりそくれよう等形院去
斉京将軍平氏をこのきまていろちう
まに天正ゆりうてさそやこ大閤ちう
をきさうてきくこ屋さくくくことさかし
ゆくくものたやくくく

あるをもとめてさせてもひとこゝろにられ
ゝこゝろ浅からぬこゝろ年にたゝこのやうなるみや
おとゝ年文のいとくちをしくあるこゝろをいとくう
のこゝろまくらゝ波ぬしもとゝろこゝろをひてそれ
ゆゑなりとものせらるゝいひまれたるこゝく
ゝゝなりゝゝいあらゝかのやうれをとう
のゝぬるゝとるゝ

菟玖波集

連歌

連歌の起源ハ古事記に神の唱和を以て始とし同じく日本書紀に神代の雅弾の一節なるハ諸雅弾なるべく
神代より始まるなれハ天の浮橋の神詠と始まるとも連歌と始まるとハいふべからず道の始もせうそこ
日本武尊の御歌を翁の連歌とし奉て文学の教ち定ハ万葉集より家持の五七五
といふを唐衣とし奉て文学の教ち定ハ万葉集より家持の五七五
七七にかゝるを始として勅撰ハ八代集ハ後撰集より拾遺集に
十七句続詞花集に十七句金葉集に至りて連歌の部と立られ十九句
入り氏時より連歌の名目ハ歌仏りかの如く延喜天暦の御代より
堀川鳥羽の御時迄ハ皆一首の歌と二人十句ばかる甚ハ
崇徳近衛の御代ハ鳥羽上皇定家家隆
たるものなれハ今ハ百員五員連歌の
のあるを伝せるかせ西山式部と定めるとうの明月記に百員連歌のこと
ハ伝へたり是ハ定て世間乱れ
ハ順徳後嵯峨の両院ことにおまをひ伏見花園後醍醐の
三帝同じく御製多く後光厳院の文和の末二条関白良基公将軍
尊氏公と語合ひ救済ハ伝せて筑波集勅撰ハ又後光厳院の
御時茶禅関東良公道遥院内府賢隆公とこのかたに十六代ハ
明應四年宗祇内勅ありて新筑波集を撰ハ皆公家に
好こゝろのこゝろ次京都将軍と始め管領三職ハ下ハ下ハ迄
皆志深くこれハ武家ようのかしとなれ
用ひ侍ハ和歌堂上のもてあそび連歌ハ幕下に
つきて伝て應永の末に宗砌明應に宗祇と
相つゞきて盛なり中ハ宗祇と古今独歩とひて花実
兼備の時なれハ其世の凡弾の高きと伝き作意のうるはしきを
ちなみ又ハ又ハ又ハ

発句之古文

発句ハ発端なれハ其詞面をうるはしく仕立て歩き文字数句へ

其句のおもをもとに切文ていふをすくとひつゝぬやらんとの也但ハ発句
句の内に仕立すれ切字ハ切字といふにてあるべし切字ハ平句の
るれハ発句ハ平句の
十八の切字ハ用ひ其外其留ハ也切字とハ切断の義にてつけて
ハ発句の留ハ其留ハ文字留ハ
連歌発句ハ必雅句不詠文・名所
又ハ国の人ハ対しての也不二筑波
又ハ不苦他作ハ

脇句之古文

脇句ハ発句に対して付るハ又添て付るの也文字にて留ハ文日脇ハ
発句に隨て時ハ
ひ
本意うるハ相対ハ
ハ添付ハ遠付心付等四躰

第三句之古文

第三ハ句の内ハ花実付ハ
ハ三ハ句ハ三ハ
ハ三ハ三ハ
ハ三ハ三ハ
ハ三

聯句発句に対して付句、又添て付るの也、文字を重て留て、古人曰、脇は発句に随て時節と遠ざかる事なし、留るも句かく文字を殘りて、発句の本意をうしなはず、相對付、於添付、遠付、心付等四ツ侍り

一第三句之支

第三は二句の内より花実付るなり、脇句より付るなり、文高と付るとせり、発句詠歌の時は、三句に連歌心わは第三は二句を不留なり、二句目定めて付なり、発句脇より付るなり、壁は発句は客脇亭主第三相伴、ラムテンシンの内より第一、壁は発句は客脇亭主第三相伴、

のん持にて付合すべし

一四句目之支

四句目は第三に付ましい付合脇句より脇句は第三に付るなり、文字を留るなり、文字を留る時は五二三四にて脇と同しく文字を殺といひて

一五句目之支

第三の句より花実付るなり、脇句より付るなり、文高と付るとせり、発句詠歌の時は、三句に連歌心わは第三は二句を不留なり、二句目定めて付なり、発句脇より付るなり、壁は発句は客脇亭主第三相伴、

一七句目之支

是は九句目ゝ付やすし、情風景にて作るなり

一八句目之支

九句目ゝ面句の内ゝは、句の定めなき在文字留りは二句目定めて付なり、文字を殺と付るなり、文高と付るとせり、発句詠歌の時は、三句に連歌心わは第三は二句を不留なり、二句目定めて付なり、発句脇より付るなり、壁は発句は客脇亭主第三相伴、

一九句目之支

九句目ゝ面句の内ゝは、句の定めなき在文字留りは二句目定めて付なり、文高と付るとせり、発句詠歌の時は、三句に連歌心わは第三は二句を不留なり、二句目定めて付なり、発句脇より付るなり、壁は発句は客脇亭主第三相伴、

一十句目之支

十句目ゝ面句の内ゝは、句の定めなき在文字留りは二句目定めて付なり、文高と付るとせり、発句詠歌の時は、三句に連歌心わは第三は二句を不留なり、二句目定めて付なり、発句脇より付るなり、壁は発句は客脇亭主第三相伴、

一十一句目之支

十句過ぬれば、句作意をもつて出句と待兼意なり、句作意をもつて出句と待兼意なり、句作意をもつて出句と待兼意なり、

一表八句内　二季句歌、季は三季は好まず、かなに

一て留メ、らん留メ、に留メ、同じく留メは二句去也、歌ゝ

一月ノ句は面八句の内、足非とも一ケ所可詠、

一旅ノ句　躰ハ面十句の内不苦、夢、枕、都、郷思、

一賦物之支

初学抜式件古以賦物為題式百貝武平貝毎句用其賦物近代発句計有賦物沙汰脇以下向不取之仍雖似無所詮聊不忘旧儀而已也　賦ハ字書ニクバルと訓ス発句ニシテ賦物の熟字一ツ宛ニ入テ作也　賦物ハ典ハ既ひろく句ニ作ル法ニ当時も本式連歌ニハ面十句熟字ニ入テ也　賦物の文字取様習ひありて傳受の一ツ成べし

一四季ノ句　春ト春　秋ト秋　等の同季は七句去也　ツギ句は

春秋は三句ヨリ九句迄不苦　夏冬は一句ヨリ三句迄也

一旅　神祇　釈教　述懐　等は同物九句去ツギ句ヨリ三句迄

一恋ノ句　九句去也　ツギ二句ヨリ九句迄不苦　一ツ面十四句内

一所ニ必可詠ハ　又二所ハ不苦時ハ

一山類　水邊　居所　等は同物五ヨリ九句去ツギ一句ヨリ

三句限　此三ツ品は体用の沙汰ハ

用ハ動ク物ニシテ三句ツギ　体とは動ク物ニシテ

体体用　里門　宮庭里　用用体　里産　架　体用　雛小　竹ツギ可然也

体用　体用体　体用体　中ノ武秩ハ不好又日物三ツ並ベ不宜也

一草木鳥獣魚虫　等は同物九句去五ヨリ草ト木鳥ト虫

獣ト魚三句去他准之ツギ二句限也

貝　鱗　獣ト云ハ生類何ニても二句去也

一名所地名皆三句去ツギ二句限也付合景物は古寄ニ憑来

ル外は当時眼前ありても不詠り角田川は渡ル舟は付合也

堤は不好他准之但又大名所ニて都吾嬬　葛　越　唐　東國

ハ国名名所は二句去也

一衣類　五句去也　衣ノ字は七句去也

一山類 水邊居所 等ハ同物 五ヨ九句去也 ツギ 一句ヨリ
三句限 此三品ハ体用の沙汰あり 体とハ動くなり
用とハ動くなり 体用ハ動くなり 体用ハ動くなり 体用ハ動くなり
里門 宅庭里 宅庭里 宅庭里 宅庭里 宅庭里 宅庭里 宅庭里 宅庭里
体体用 用用体 体用 体用体 中 賀茂 体用ノ品未ニ出ス 用体
一草木鳥獣魚虫 等ハ同物 五ヨ九句去 五ヨ 二句 ヨリ草木鳥獣
獣ト魚三句去他准之ツギ 二句限也

貝鱗 獣ト也ハ生類何ニても二句去也
一名所地名皆 三句去ツギ 二句限也 付合景物ハ古寄ニ債来
ニ外ニ為時眼前ニあるとも不詠 角田川ニ渡シ舟ハ付合也
堤ハ不好他准之 俱ニ大名所ニ 都 音嬬 慕越 唐 東國
ヨリ国ノ名所ハ二句去也
一衣類 五句去也 衣字ハ七句去也
一寒暑 冷暖ノ句 五ヨ 二句去也
一花ノ句 右正花ニ 百員ニ四ツ可詠也 俗物ハ花ニ面ヲ嫌
但雪ヲ花ノ類也 花抱 春秋花ヨリ 花ヨリ 花ヨリ 雖也 花ヨリ 功者ハ
定座ヨリ 定座ヨリ 定座ヨリ 定座ヨリ 定座ヨリ 定座ヨリ 初心ハ遠ク

発句ニ定座ヨリ 初ハ十三目定座也 定座ヨリ 俳ハ附
句ヨリ 子細ヨリ ・花句ハ桜付ヨリ 桜ヨリ
花ハ短句ヨリ 花ハ不好長句ヨリ 才ハ不苦也 ・諸草木ノ名ヨリ
花ノ句ハ五句去也
一櫻ノ句 春三ハ 紅葉一ツ 名目一ツ 以上四ツ ヨリ 余ヨリ
愛翫ヨリ
一梅 春一ツ 紅梅一ツ 抱一ツ 冬一ツ 夏一ツ 以上五ツ 出勝也
多キハ好ヨリ
一郭公 只一ツ 異名一ツ 又ホトトギス 程時不過
ホトトギスト一ツ 但声ヨリ 結ヨリ
ホトトギス

一月ノ字 七句去也 秋季ノ月ハ百員ニ八ツ 表一所可詠 然
名残ノ裏ニ不詠 七ツノ ヨリ 季ヨリ 持月七ツ ヨリ 他季ノ
月出勝ヨリ 年月ノ月ノ字ハ月次ノ月ヨリ 大象 月
孟ノ月ノ 七句去ノ月也 光影 影 月ノ
影 暁ノ光 月ノ
一雪 百員ニ四ツ也 冬 春一ツ 出勝ヨリ 四ツ 冬小 ヨリ
似セ物ノ雪ハ面ヲ嫌也
一雨ノ類 大小ノ降物ハ雨ニ字 百員ニ二ツ也 ザメアマト 替リ
表嫌ヨリ ・大降物ト 雨 夕立 時雨 急雨ノ ヨリ
小降物ト 雪 露霜ノ ヨリ 名ノ 大小降物ヨリ 物
五句去 替リテ三句去也 霧ヨリ 三句去
一餅 畑 畑 雲 霞 雲ハ 霞ハ 降物 二句去
但畑ト畑 七句去 松竹霜水 霜ノ畑ハ 餅物ヨリ 二句去也
雲ヨリ 霞ヨリ 五句去
一風躰 五句去也 嵐ニ 吹風ト 松 萩ハ 風躰ニ
二句去ノ ヨリ 羽吹 ヨリ 月上
一夜分ノ句 五句去 ツギ 三句限也
一朝夕時分ノ句 同物 五句去 ツギ 三句 五ヨ 三句去
一聞氣味句 二句去 声 響 音 結ヨリ 句 ヨリ
一行歩ノ句 二句去 ツギ 二句限也

一不ノ奴ハ付句嫌也 不ハ又ハ二句去也
一シ文字 過去 現在 未来ノ シ文字 四物ハ二句去 替ハ世モ不嫌
シ留リ 何ニモ 二句去 シトシモ 二句去
一本哥之古文
堀川院百首作者 近 本哥ニ用ヨリ 也 未ノ撰集ニ入ル 本哥ニ
ヨリ 也
一證哥之支
本哥ハ附合ニ用ヨリ 也 證哥ハ一句ノ證ニ ヨリ 近代ノ
人ノ哥ヨリ ヨリ 證據ヨリ シ
一故古文

和漢ニ共ニ取用ヒ 耳 耳 耳 耳 耳 耳 耳 耳 耳 耳 耳 耳 耳
附心ヨリ 面白ク ヨリ
一物語ノ意ノ句 二句去也 源氏ノ物語ハ大部ヨリ 表ニ 替心ニ 替
ヨリ 外 竹取 ウツホ 伊セ 俊ヨリ
一前後ニテ不付物
吉野ヨリ 花ハ付ヒ 立田ヨリ 抱ハ付ヒ 更科 姨捨ヨリ 月ヨリ
宮城野ヨリ 萩ヨリ 船橋 馬車ヨリ
繪ヨリ 屏風 扇ヨリ 道ヨリ 田ヨリ

一本哥之支
堀川両度百首作者迄ト本哥ヨリ用ヰる也末の撰集ヨリ入レも本哥に
なる也
一證哥之支
本哥ハ附合ヨ用ヰる也證哥ハ一句の證ヨリ出ヲる也近代の
人の哥多くこれを證據ヨリ引くなり
一故古支

二留リ何ヨリも句去、ビトビモ二句去

和漢とも取用ヒ〜〜耳遠き不好次に耳引く古ヨリ句の
附心ヨリ面白くきせ支ヒ
一物語ノ意ノ句二句去也源氏の物語大部ヨリ春ノ心ヲ替
ヲ〜〜ヒ外竹取ウツホ伊勢等ヨリ数句あてこれ用ヒ
一前後ニテ不付物
吉野ヨ花ハ付ヒ〜〜、立田ヨ抱ハ付ヒ〜〜、更科姨捨ヨ月ヨリ〜〜、
宮城野ヨ萩ヨリ〜〜、道ヨ船橋馬車ヨリ〜〜、筧ヨ田ヨリ〜〜、
繪ヨ扇風扇ヨリ〜〜、

一表十句之内可用品類
春、若菜、梅、残雪、余寒、鶯、囀、鳴、霞、長閑、うゝ、氷解、下萌、
水温、東風、春雨、春月、朝狩、抑、角賀、木芽、蕨、春駒、苗、接、
帰雁、永日、茅、帰鳥、春鶯、松若緑、暮春、
夏、更衣、卯花、鵑、新樹、夏艸、行、五月雨、蛍、早苗、短夜、夏月、
夕立、雲峰、暑、結清水、納涼、秋近、
立秋、残暑、冷、身ヘ、抑散、露、雫、月、虫、萩、荻、尾花、
薄、花野、星、虎、稲、雁、砧、野分、長夜、
菊、夜寒、冷ヒ、艶、露霜、上括、暮秋、
初冬、時雨、霜、木葉、冬菊、氷、枯野、千鳥、水鳥、風、狩、冬月、
霰、雪、霙、冬梅、歳暮、
山、峯、岡、谷、梦、畑、桟、

水、滝、海、浦、沖、濱、浮、洲、磯、江、溪、
汐、波、蜑、川、瀬、池、淵、沢、沼、井、堤、岸、
橋、舟、
里、家、宿、屋、軒、戸、扉、窓、門、垣、笆、
砌、外面、苫、茨、
木、草、叢、松、枝、森、藻、芦、竹、笹、
鳥、鶴、見、鷺、烏、
旅、都、舎、関、舟、駒、俄、巌、
日、星、空、天、朝、夕、暮、夜、曙、暁、野、雨、
風、嵐、雲、烟、田、鐘、岩、石、真砂、柴、笠、

蓑、焚、袖、袂、衣、
一体用之品大概
山類ノ体
山、峯、屋、谷、裏、洞、嶋、
嵩、島、阪、岡、
同用
・桟、畑、滝、滝ヲト云山類ニテ云
水辺ノ体
水、浦、渚、濱、磯、津、沢、沼、湊、
江、堤、海、沖、池、川、江、岸、滝、浮、溝、井、
泉、洲、
同用
同体用外
・水、波、清水、氷、氷柱、汐、
・井、関、舟、網、筏、橋、簗、湊、蜑、
水鳥、水草、類、流、量ハ用ヒ云
居所ノ体
家、宿、里、床、門、楼、屋、戸、
垣、扉、壁、蔓、閨、笆、笠、
同用
・外面、庭、
同体用ノ外
・栖、戸、指、岩戸、関戸、窓戸、砌、草茨、
有家、隠家、架、皆ヲノ居所ヨ云

一座二句去物大概
バヤ、ニ、ハ、バヤ、ニ、ヨ、ニ、ニ、ニ

居所、垣、扉、壁、蹇、閨、邑、野、庭門、柳、屋、戸、家、宿、
同用　・外面、庭、笠、栖、岩戸、関戸、窓戸、砌、草茨、
同体用ノ外　・栖、戸、籍、岩、
有象、隠家、架、皆ニシテ居所ニ云

一座二句去ノ物大概

ハヤテ、ハヤ、二ノ間、三ノ間、二ノ、三ノ、ナル、ヌル、ベシ、ニト、ハ、
トテハトモリ、ル、ル、ル、ル、ル、ル、カヤ、ヨリ、ダニ、

ダリ、ダル、ダ、ダ、ダ

生、池、イケ、耻、遥、カキ、放、烈、運、橋、走、演、新、同、調、豊、通、泊、認、年、友、地、沼、貫、又、甲、
終、オヲ、関、岡、及、巳、急、輪、若、破、香、負、角、
雁、假、枯、鏡、浮、詰、迷、限、垣、傾、カヤ、黄、且、
悲、唐、カラ、笛、賢、カモ、カコウ、カハ、笛、代、横、余、所、ヨシ、
宵、谷、違、使、尋、種、多、ヒ、旅、ソイ、染、ソメ、因、机、
底、津、鶴、東、ツキ、ツヒ、ツム、ツク、堤、ツツ、維、ツス、連、
突、作、妻、告、傳、次、眠、半、流、詠、習、歎、渚、

並、靡、ナビク、向、迎、睡、群、浮、ムケ、選、受、
動、海、ウミ、失、井、足、道、望、軒、覚、驚、加、
居、裏、折、オレ、生、行、沖、狭、惜、面、オモ、押、
口、村、車、苦、多、砕、崩、悔、限、種、箭、宿、
舎、ヤ、休、九、任、出、稀、先、巻、正、交、ハラス、
ゲニ、合、泗、吹、嵐、文、林、卧、氷、如、琴、好、乞、
杖、江、照、寺、テラ、ニ、笛、哀、朱、化、アイ、アヲル、旋、
顕、嵐、奇、ヲタ、両、沢、障、轉、猿、阪、盛、栄、
寒、返、様、寂、極、清、嫌、キヤ、君、岸、ヲム、ヲク、
カキ、女、目、緑、峯、柴、暫、鹿、然、隨、閑、品、

慕、云、凌、シノ、嵩、ニ、笛、久、ヒ、廣、独、ヒトシ、偏、
光、臺、元、求、催、持、瀬、洲、皇、筋、裾、世、
澄、枚、進、涼、

同 三ツ之物

飛、契、ヒ、遅、鐘、カゴト、神、名、ナラシ、柳、守、更、
藤、生、梢、厚、芦、渚、ナギ、都、塩、時、西、
紅、兼、ヲヤム、墨、

一発句ノ字ノ夏

此類皆品春心春憲名所ナニ二ツ三ツヤリト可心得也

ヤカ、ソ、コウ、シ 現在、シ未来、澄也、又オシ也、イサ、イク、イク

イカ、ナド、ナニ、ケリ、カナ、モガ、モナ、此三ツ 共字モ中キ切也

下知詞、ケセテナ、ヘメレヨラ、ナ此十字切也

古人句ノ大四字

ヤ

鶯や、とて、こゝろのわや、島
花の枝もかくるゝ春の夏木立
二条のいすそ、ゆ、しも、ひ、ぎ、
ひ、ぎ、ハ、花、これ、うゝ、春の風
河わたる、ま、ざ、うす、ま、の、雪
ゆ、く、ま、ま、ま、ま、ま、宿の梅
枯文ぬ、松のまかの沖つ波

宗祇
智蘊
祇

カ

ツ

シ

ヨ

ヌ

春、ハ、代、ハ、ク、ハ、ク、ハ、の、玉、椿、
深、ク、ク、ク、ク、ク、ク、ク、ク、ク、ク、ク、ク、
何、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、と、枝、ク、て、ク、ク、ク、ク、ク、ク、ク、ク、
ク、ク、ク、ク、ク

下紙ケ

ナツヨレメベテセヘ

右十八智也世界まも数多あり疑の字もそ、六ら切也
二度切、三度切、大迴ニ小迴ニ等傳受たまへ

一筑波之道とい一支

古事記景行条曰早其國謂阿豆麻也即自其國越出
甲斐坐酒折宮之時哥曰疑底伊久用加泥都流
途比婆利都久波遠須疑底伊久用加泥都流
尒其御火焼之老人續御哥曰
加賀那倍底用余波許々能用比余波登遠加表
是以答老人即給東國造ニ云
●筑波集の序ままつはの道と云ふ傳川の源と汲てと書ぬり

一片哥とい一支

三字六ヶ和哥とするのその名の神詠よりて無道とい一也
服以下継く付ハ発句といひ句ヲ片哥とい片奇とい一也
古事記同条曰日本武尊御哥
波斯祁夜斯和山幣能加多由久毋葦多知久毋
是片哥也末ヲ継ぎる句と二条大閤もつは集ニ片句載ぬり

一本式目連歌一支

本式目ハ新式ニ対して有式と云ふ新式ハ昔の式法とかて
連哥百員するの也筑波集まも新式本式相ハ交ぜ鷺尾の
花下て百二句と詞書ハ古くよりの名也今も本式目と用ひて
すること多し

一千句ハ萬句之支

一百員、千句、万句、十万句、古例ありて其作法皆ある也

一百員、五十員之支

発端ハ古ヘる如く五十員ハ百員の末満尾半て半ヲ終り
ハ拍子東鑑まも連哥五十句と云ふ古くよりの名也
七夕ハ七十員の連歌とい一ひ

一世吉之支

四十四句連歌、始終世吉と唱ハ百員の初折と
名残の表と合せる如き書法也 紹巴ハ始る

不見記行 月すくしるけやはらえ 紙子ある 紹巴
夜ハふくゆる日四十四号午時ハ暮てとく是世吉也

一歌儒之支

三十六句中書の書法折目四ツ面と裏とに六ヶと穂る也
去嫌まも心得ハ世吉ハ始ハ
奇仙ハ始ハ世吉ハ
世ハ世六のしくさの 花の 種 黄載
全巻作ハ三十六句と云ふ
奇仙作者と物の名ハて
山柿のか津 多ハ深ハ 秋の 函 細川高国法名 常恒

一連歌撰集 独吟三十六句ハ

勅撰 筑波集 延文元年 序者 二条大閤良基公 撰者 救濟法師
同 新筑波集 明應四年 序者 西三条内府実隆公 撰者 宗祇法師 撰者 一条関白冬良公

句集

竹林抄 宗勧、敬、専順、行助、宗伊、能阿、智蘊、
老葉、下草、賞草、 宗祇、集

園塵 黄載句集、春夢草、 肖柏、
壁草、 宗長、
発句帙、 撰善集、 古人発句集也

初学富用書目
筑波問答 名園池物語 二条大閤良基公御作
十住心院心敬僧都作

一連歌撰集　独吟三千句より

撰集　筑波集　延文元年　序者　二条太閤良基公　撰者　救済法師

同　新筑波集　明應四年　序者　西三条内府実隆公　撰者　宗祇法師　執奏　一条関白冬良公

句集

竹林抄　宗砌、敬、東順、宗牧、宗伊、能阿、智蘊、老葉、下草、賞草　宗祇集

園塵　兼載句集、春夢草　肖柏、壁草　宗長、、発句帙、撰善集、古集、古人発句集也

初学富用書目

筑波問答　名園池物語　二条太閤良基公御作

吾嬬問答　名角田川　十住院心敬僧都作　宗祇作

要心問答　同　若草山　兼載作

連歌至宝抄　紹巴作

破邪顕正

無言抄　西順作

百員古連哥　五巻　天文十年　高野宗食憑其上人作

石山百員　天文十年　連歌十五人

湯山両吟　天文十四　二月廿日　宗伊　宗祇　良基公

水無瀬三吟　長享二　閏月　宗祇　肖柏　宗長　宗伊

有馬　三吟　延徳二十月廿日　柏　長祇　宗祇

独吟　明應八　三月　宗祇

同千句　五巻

紫野千句　年号不知　撰者　野ハ紫の　本末ハ雨　越後

三嶋千句　文明三三月廿日　豆州三嶋法楽　撰者　宗祇

聖廟法楽千句　明應三二月十日　兼載

三嶋千句　永正元十月　宗長撰者　氏親

花千句　永正三三月十日　於近江　連歌十人　聽雪

右百員千句の古連歌ハ句の仕方付合の仕方句ごとの

附合可用書

付合小鏡、　安心集、　手引糸、

水迦月、　名所小鏡、　袖珍哥枕、

一會席之支

床間ハ天満宮の名号或画像を掛る其中名号とハ崇敬画像とハ其流渡唐の像を其前香炉花瓶松梅おのおの洗米御酒を備ハ時ハ執筆立て読上る也先香炉ハ火を入て香を焚く連衆一同拝伏一発句ハ発句ハ出を初次順の人ハ礼を不次向い句と出をハ長句ハ五文字と出ハ七文字と出ハ短句ハ出ハ下名残の裏ハ役ハ満吟の上挿句ハ定ハ宗砌と執筆ハ其席の上中ハ和哥の講師読師の如く尤其席を指南する

外略式の會ハ定ハ宗西と執筆ハ其席の上中ハ和哥の導師也身方にハ

一同廿九禁制之支

一発句ハ乗

一発句ハ乗

一ひゝ眠ハ

一會席之支

床間ハ天満宮の名号或画像と掛ル其中名号ハ崇敬画像ハ其次ニ渡唐の像ハ又其次ニ其前ニ香炉花瓶松梅ハ流儀御通ハ備ル時ハ執筆立て讀上ル一巡の間自分の香ハ炷く連衆一同拜伏ス発句ハ次の人ハ礼ハ次順の人ハ礼ハ向ハ句ハ出ル次ハ長句ハ五文字ハ出ル次ハ七文字ハ出ル次ハ短句ハ出ル次ハ七文字ハ出ル次ハ長句ハ五

連歌地下のあつかひとなりて今の連歌所の始なり花園院僧長正和
のころ花下の善阿法師並びなき上手にて地下の宗匠花のもとの
稽古もせんかたなしとて道とこそたとへ始るなり紹巴子に救済
周阿といふ者を名とのうち中もこれを救済接群して和歌に藤谷為相の
孫子將も九旬余迄存命三条大閤の師と定めぬ中ころ世の人皆
以ての外に貴治應安の比の棟梁なり其後周阿
道と受継ぎ救済風体世々に勝部師綱入道梵阿号梵竹軒
御点を付れ父子相隨て僧形の勝部師綱入道梵阿号梵竹軒
道とうけ給て梵竹軒勅撰加へ連歌の中興永享九
頃迄あて九十余年を経て彼灯消うせ高山民部時重入道宗砌文安
のころ寛正の比迄連歌して公時の風体を伝ひ同時
六人の明哲相並びて名とひろく世に種玉庵宗祇法師はこの中風を受て
心敬専順のごとくにしるしとなる伝統
式部卿宮の風体を学ぶ
中興の祖と後代迄も仰ぐ事なり

長享三年八月日

右宗匠大概を恨連歌

紹賀伊賀道
種玉庵宗伊
宗祇

いにしへ上古也又西三条道遥院殿道と尋ぬ世のあ
人おわすさて道統とハ兼載法橋とうけられ兼載宿祢ニ
うせて宗長独也命ありて紹巴の宗牧その外は周桂と
うけて交迄宗長在世也其後宗牧宗養父子相續て傳道せり
牧の内中村昌休は其子昌吠其子に紹巴也巴その始は周桂は
ふネ子休は隨身して又養子として受て永録四年休没一周忌年
養も四十にして平せり紹宗養天性妙處にして武公の風骨を
連綿とせしと称美せられしかもこれ弁賀ぎやと世の人
愁ひるとも為ふ永亀天正の比紹巴ひろく天下に自と聞る者
なく豊臣家に年仕て知行所地を賜ひ法眼に叙せられ家武家に
道と変て一家をなせり休子昌吠早く父より別し其後巴より別家
ありて何こ同じきて名と発し法橋に叙せる巴志ひ謫居せられ
領地でもなくて叱の紛ひ叱子昌琢より関東に住て里村家代々
花下の宗匠と称せる傳説の次第大ひなるかのあり委しくハ父の
考よあるところに略しるせる也

千時天保四巳年九月下旬

後学
吟尚阪昌易識